

イギリス文学②

作家の受容と「世界」の視座

本誌の読者には、去年秋から日本でも公開され、最近DVD化された、Pascale Ferran監督のセザール賞受賞作 *Lady Chatterley* (仏2006年) を観た人も多いだろう。BBCウェブサイトの映画レビューは、このフランス映画を「史上最高のチャタレー映画」と高く評価し、「性は率直であるが煽情的になることはなく、また、[主演女優の] Hands がこれほど自然体で雨の中を裸で踊る場面を演出できるイギリス映画を想像することは難しい」と賞賛する。*Lady Chatterley's Lover* とフランスは縁が深い。この小説は、イタリアのフィレンツェでの私家版出版の後、パリで普及版が出版された。また、全部で四作あるLCLの映画作品のうち、三作がフランス作品である。英文学の分野に属するはずのLCLは、イギリス外部のヨーロッパ文化の中でこそ、その本質が最大限に引き出される作品と言える。

ヨーロッパ諸国におけるロレンス受容についてのよい手引きになるのが、*Lady Chatterley* 日本公開と同年に出版された、Christa JansohnとDieter Mehl編による *The Reception of D.H. Lawrence in Europe* である。この種の研究としては、すでに1999年に、飯田武郎氏の編集による *The Reception of D.H. Lawrence around the World* が発表されている。前者は、射程範囲を「世界」から「ヨーロッパ」に限定するが、紹介される国数は後者に匹敵する。本論集は、ヨーロッパ各国のLawrence受容史研究としても利用可能であるが、全体を通読することで、一人の作家を参照点とするヨーロッパ文化のダイナミクスが浮かび上がってくる。その大きなコンテクストにLawrenceを再配置することで、新たなLawrence研究の可能性が見えてくるだろう。例えば、Lawrenceの国外受容の過程で必然的に生じる文化的摩擦力によって自ずと際立ってくるのが、この作家のEnglishnessの問題である。各国の受容論をうまく再構成することで、国外受容の観点からLawrenceのEnglishnessを逆照射するための有効な視座が得られるだろう。また、文化的摩擦力の一要素としてしばしば焦点が当てられるのが、翻訳という行為である。本書から見えてくるのは、翻訳によるLawrenceの'cultural appropriation'の様子——'a symbol of the spiritual state of our epoch', 'part of our culture' としての回収、あるいは政治的プロパガンダのための利用——であり、さらに、文化的アレゴリー化としての翻訳行為そのものの特性である。

同年、Lawrence受容研究はさらなる広がりを見せた。*D.H. Lawrence around the World: South African Perspectives* の登場である。編者のJim PhelpsとNigei Bellは、本論集出版の主な動機を二つ挙げる。一つは、国際レベ



ルのLawrence研究における南アフリカの学術的貢献の低さに対する自意識。もう一つは、上記の *The Reception of D. H. Lawrence around the World* の「世界」における南アフリカの不在である。その不在部分を埋めるかのように、本書の大半が、南アフリカ出身の研究者たちによる回顧録と書簡、そして既出論文の再録によって構成されている。それはまるで、この国におけるLawrence研究史・教育史の自伝あるいは伝記のごとき印象を与える。本書は、南アフリカにおけるLawrence教育の歴史だけでなく、この国における「英文学」という学問制度そのものの盛衰の過程——その背後には、F.R. Leavisの多大なる影響と、それへの抵抗の歴史があった——を知るうえで貴重な一冊である。全体的にやや保守的な印象は否めないが、それでも、新たに収録された論文を熟読すると、ポスト・アパルトヘイト時代の状況に対する強い意識とともに実践されるテキスト解釈は、強烈な読みのアクチュアリティに満ちており、今後のLawrence研究における'South African perspectives'の重要性と可能性を強く感じさせるはずだ。

本書の登場によって、Lawrence研究における「世界」は、より実質を伴った意味での「世界」に近づいた。次に来るべきは、「世界」の多様な視座間の交渉だろう。そのためにも、まずは、'South African perspectives' に対する「世界」からの応答が求められる。

—— 龍島 慶邦